

ISと火拳

ふえふえふ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

マリリンフォードで死んだエースがISの世界にトリップする話。

初めてですので暖かい目で見守ってください。

目次

プロローグ	1
第1話	7
第2話	15

プロローグ

—プロローグ—

目が覚めるとそこは、知らない部屋だった。
確か俺はルフィを庇って死んだはずだ。

「どこだここ？ひよつとして天国か？」

「そんな訳ないだろ。ここは、IS学園だ。」

声の聞こえた方に振り向くと、そこには黒髪を腰の当たりまで伸ばした
女性がいた。

「私の名前は織斑千冬だ。この学校で教師をやっている。」

お前が学園の入口前で倒れていたところを私が見つけて保健室まで運んだんだ。

それで、お前は、何者なんだ？」

「俺の名前は、ポートガス・D・エース、白ひげ海賊団で2番隊隊長をしていた。」

というより、俺は腹を貫かれて死んだはずだ。ここは本当に天国じゃないのか？」
そう俺は赤犬の攻撃を受けて致命傷だった。なぜ生きてるんだ。おそろおそろ自分の

腹を見てみると傷あとがあるだけで、治っていた。

「治ってる？ どういうことだ？ お前何かしたのか？」

「いや、元からその状態だったが、それよりも、死にかけていたってどういうことだ？
それに白ひげ海賊団とはなんだ？ 聞いたことがない。しかもここは日本だぞ海賊な
んて

いつの時代のことだ、タイムスリップでもしたのか？」

エースは、顔をしかめた。

「どういうことだ、白ひげ海賊団を知らない？ そういえば、IS学園とか言っていた
な。聞いたことがない。しかも、よく周りを見ると見たこともないようなものがいつば
いある。」

もしかしたら、グランドラインのどこかにあるのかもしれないが。

まあ、とにかく今は、目の前にいる女性の問いに答えよう。

それから、これまでの経緯を話した。

「それで、お前はマリolfordというところで弟を庇って死んだということだな？」

「おおまかにいえばそういうことだ。」

「正直のところ信じられないが、、、」

「つぎは、こっちの質問に答えてもらうぜ。IS学園てなんだ？」

「ああ、それはだな、、、」

(説明中、、、)

ということだ。」

なるほど、しかしひどい話だな。ISというものができて女尊男卑の世の中になって

いるなんてな、まあ、でも聞いた話では、俺の脅威には、成り得ないな今のところは。「それで、ポートガスも何かの能力者なのか？」

千冬は、興味本位で聞いてみた。

「ああ、おれはメラメラの実をくった炎人間だ。試しに俺を殴ってみろ。」

千冬は、驚いた顔でこちらを見る。

「何をいつているんだ、さつきあつたばかりの人間にそんなこと出来る訳ないだろ。」

千冬はしづついていた。それもそうだろう。いくらなんでも、初対面であつた人を殴れるはずが

ない。

「ああくそ。じれったいな」

そういうと、エースは近くにあつた果物を切るナイフを取ってそれを、、

自分の胸に刺した。

「おい何してんだお前つ、なっ!？」

しかし、さした場所から血は出ず無傷だった。

「これがロギアのメラメラの实の能力で普通の攻撃は当たらない。しかも炎を操ることがができる。」

千冬は、少しの間黙り込み何か考えているようだった。そして、きりだしてきた。

「そうかよくわかった。ところでおまえ行く宛がないだろ。交換条件だお前がこの学園で今年から入学してくる私の弟の一夏の護衛をする。その代わりに私は、お前の衣食住を保証しよう。いい条件だろ? まあ断るのもいいがその場合はそこらの研究所でホルマリン漬けになるかもしれないがな。」

ホルマリン漬け!?! どんな世界なんだよここは。まあ、捕まることはないと思うが、正直、この世界

で、1人で生活していけるとは、思えない。ここで、まず、情報を集めよう。

「分かった。その条件のもう」

「そうか、これからよろしくなポートガス」

「ああ、よろしく、織斑」

千冬は、部屋から出ようとしたが、ふと思い出したことがあるのかまた、こちらを向いた

「ああ、そうだ、これからわたしは、お前の先生ということになるから、呼ぶなら織斑先生と

言え。いいな」

「そういい、部屋から出ていった。」

「ふうー、それにしても疲れた。今日はもう休もう」

そして、エースは、目を閉じた。

こうして、1人の男の新たな冒険が始まる。

第1話

—一夏side—

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。

それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。しかし、一夏は、そんなことを言っていない。周りの状況にいた。周りは女子しかおらず、この教室の中で男子は俺しかいない。それゆえ、周りからの視線が一気に俺に向けられている。正直、とても居心地が悪い。

「はあー」と一夏は深いため息をつく。なぜ、俺がこのIS学園にいるのかというと、理由は

簡単。ISを動かしてしまったからである。本来俺は、藍越学園を受けるつもりだった。

しかし、試験会場で迷い、ある部屋に入った。そこにはISがあった。それを、興味本位で触って

しまい、起動させてしまったところをIS学園の試験官に見つかって、強制的に入学。ま、それもそのはず、ISは女性しか乗ることができない。つまり、俺はそれを動かしてしまった。

こうして、世界初の男性操縦者となり、一躍有名人となった。めでたしめでたし
(じゃあるかボケツ!!!)

「……くん。織斑くん……」

なんだ、俺を呼ぶ声が聞こえる。あまりの視線の集中砲火に晒されて幻聴でも聞こえるようになった

のか？嘘であつて欲しい……

「あのー聞こえてます〜？織斑くん……？ぐすん。ていうか幻聴じゃありません!!」
「わっ、はい!?というより聞こえてたんだ。すみません」

やっ、やばい!!!いきなりの大声で呼ばれて思わず声が裏がえってしつまた。案の定、クスクスと笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かない気分になる。というより聞こえてたんだ……

「あつ、あの、大声出しちゃつてごめんなさい。お、怒つてるかな？ゴメンね、ゴメンね!

でもね、あのね、自己紹介、「あ」から始まつて今「お」の織斑くんなんだよね。だからね、

ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

ペコペコ山田真耶先生が頭を下げていた。というより、どつからどう見ても、この先

生、先生に

見えない。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ちて着いて

ください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がぼつと顔を上げ、熱心に詰め寄る山田先生。こりやまたすごい目線を浴びてるんですが。火に油を注ぐとはきつとこのことだろう。しかし、男子たるもの引くわけにもい

かない。

ここは、一発かましてやるぞ!!

「えー、……織斑一夏です……」

ノ之箒に救い

の目線を送るが、そつぽを向かれてしまった。仕方がない。最終手段だ。

「ふうー。はあー」

大きく深呼吸をした。そして……

「以上です!!」

がたたつ。思わずずっとこける女子たち。どんだけ期待してんだよ。期待する相手を間違えてる。

「あ。あのー……」

背後からかけられる声。もう泣く寸前の声である。え？あれ？ダメでした？

「いつー!?!」

突如、後頭部を叩かれて、目の前が真っ暗になりそうになった。この叩き方。身に覚えがある……

もしや!?!おそるおそる振り返るとそこには、黒のスーツにタイトスカート、スラリとした長身、

よく鍛えられているが、けして過肉厚ではないボディライン。組んだ腕、狼を思わせる鋭い吊目。

「げえっ、関羽!?!」

ドゴッ!本日2回目ありがとうございます。ていうより痛えー。ていうか今の音出席簿が出せる音

ではない……

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

なんで、千冬姉がここにいるんだ？職業不祥で月に12回ほどしか家に帰ってこない

俺の実姉は・・・

「あ、織斑先生、もう会議は、終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

・・・初めて聞いたぞ、千冬姉の優しい声。

「い、いえつ。副担ですから、これくらいはしないと・・・」

さつきからの山田真耶先生の涙声がなくなり、逆に、織斑千冬に向けた熱い視線へと変わっていた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。」

私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる、私の仕事は

弱冠15才を16才までに鍛えることだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

周りは静寂に包まれ、そして・・・

「キャー、千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」
もう信者に近いなこれ・・・

「私、お姉様のためなら死ねます！」

きやいきやい騒ぐ女子たちを、千冬姉はかなりうつとしそうな顔で見る。

「・・・毎年よくこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？
私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

・・・相当うつとしがっているな。普通なら喜ぶべきところだろ、そこ・・・
ていうより、今でもつと騒がしなつたな。元気なことで。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

厳しくない!?ただでさえ男一人なのに、あの状態じゃ緊張して、まともにできるわけ
ないじゃん。

「いやー千冬姉、俺はー」

パアーン！本日3発目。なんだよこれ漫才かよ。ていうより、少し気持ちよ・・・いか
んいかん危なかった。あと少しでMになるところだった。

「織斑先生と呼べ」

「・・・はい織斑先生」

このやりとりはまずかったと気づく一夏。それもそのはず、今ので、姉弟ということ

が教室中の

バレてしまった。

「えっ……織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男で「IS」を使えるっていうのも、それが「静かにしろ!!」……」

千冬姉の大声でまたもや教室に静寂が訪れた。

「これより、IS学園に急遽入学になったものを紹介する。ポートガス入ってこい」

シユンと扉が開くと、そこから、オシャレなサングラスのようなものがついたオレンジ色の帽子

をかぶり、俺と同じIS学園の男用の制服を着た、黒髪でハンサムな男が入ってきて
教壇の前に

立った。

「自己紹介しろポートガス」

「おう。俺の名前は、ポートガス・D・エース。織斑一夏の護衛としてここに入学することになった。これからよろしくな」

一夏は、もう一人男がいることにホツとしたのと同時に変な単語が聞こえたような気がした。

が聞き間違いじゃなかったようだ。
「護えいく!？」

また、教室が騒がしくなった。

第2話

—エース side—

今、エースは、IS学園1年1組のドアの前についている。織斑・・・じゃない織斑先生が入ってからだいぶ経つが、何をしているんだ？なにやら中は騒がしいが・・・にしても、護衛か、今まで一度もそんなことしたことないが、大丈夫だろうか・・・まあいい。

すぐになれるさ。とにかく織斑先生の弟を護ればいいだけの話だ。

「ポートガス、入ってこい」

エースは教室の中に入り、教壇に立った。

「自己紹介しろポートガス」

初めは肝心だ。そういえば、小さい頃よくルフィやマキノと練習したな。よし、いつちよやったるか。

「おう。俺の名前は、ポートガス・D・エース。織斑一夏の護衛としてここに入学することになった。これからよろしくな」

沈黙が続く・・・俺なんか変なこと言ったか？と考えていると・・・

「護えい〜!？」

みんな、驚いた顔でこちらを見る。・・・

「ああ、そこにいる織斑一夏が世界初の男性搭乗者になって、政府が、護衛をつけることに

したんだってさ。それで、選ばれたのが俺っていうこと。まあ、織斑先生の推薦だな」

というと、みんな織斑先生へと視線を向ける

「まあ、そういうことだ。それじゃ、時間もきてるからポートガス席に着け。お前の席は、織斑の後ろだ」

言われたままに席へ向かい着くと、織斑一夏が後ろを向き小声で言ってきた。
「知ってると思うけど織斑一夏だ。よろしくなポートガス」

「ああよろしく。それと、エースでいい。そっちの方が慣れてるからな」

「分かった。じゃあ、俺も一夏でいいから。改めてよろしくなエース」

「よろしく、一夏」

こうして一時間目の時間を迎えた。

「・・・これは、さすがにきついな」

一時間目のI S基礎理論が終わり、今は、休み時間。エースはぐったりしていた。I S学園では、コマ限界までI S関連教育をするため、入学当日から普通に授業がある。

「ぐうー」

腹減ったー。早く飯食いたいなと思っているところ、前にいる一夏が声をかけてきた。

「エース今の授業の内容分かったか？俺は、全く分からなかった」

どうやら、一夏の方もだいぶきているようだ。疲労の顔が伺える。まあ、一夏はそれだけじゃないようだが。

「お前と同じだ一夏。にしても、お前はそれだけじゃないだろ、俺より醜いぞ」

「ああそのことか、実はな女子からの目線でめいっていてな……ってお前はなんともないのかよ!」

「ん? 別になんともないが……」

一夏は、きよとんとした表情でこちらを見ていた。

首をかしげるエース。なぜ、そんなにしているのか理解していないような表情だった。

「いや、普通に周りが女子しか居なくて、こんなに見られてたら「ちよつといいか」……えっ?」

話に割り込んだ声の方を見るとそこには、黒髪のポニーテールで織斑先生ほどではないが、少し目が鋭い女子が立っていた。

「箒?」

どうやら、一夏の知り合いのようだ。

「少し一夏と話がある。借りてもいいか?」

「いいぞ、そんなに大した話じゃなかったしな。それじゃ、後でな一夏」

ふうー、あとは時間がくるまで寝ておくか。少しは、空腹を誤魔化せそうだし。とエースは、目を閉じた。

2時間目のチャイムが鳴り授業が始まった。エースは、チャイムと同時に起きた。

そして、授業が進んでいくが、どうも、集中することができない。元からエースは勉強が得意な訳ではない。それから、目の前がだんだんと暗くなりねてしまった。

・・・気がつくとエースは、海が見える丘にいた。目の前には小さい頃のルファイが縮こまって泣いていた。

・・・夢か、しかもサボが死んだときの記憶だな。

すると、ルファイがこちらに向かって涙声で言ってきた

「・・・・・・・・エースは死なねえでくれよ・・・・・・・・！」

エースはルファイの頭を叩き・・・

「バカ言つてんじゃねエよ!!おれの前にてめエーの心配しやがれ!!!おれより遙に弱エくせによ!!!」

そして、エースは、真剣な形相になった。

「いいか覚えとけルファイ!!!おれは死なねエ!!!」

ああ、そうだ、あの時俺はああ言っただよな・・・

つくづく、不甲斐ない兄だぜおれは・・・
そして、頭に、打撃をくらい目が覚めた。

すると、目の前には、怒った織斑先生が立っていた

「何をしている、馬鹿者。今は授業中だ。さっさと起きんか」

「すみません。」

「分かったならいい。山田先生、続きを」

さっきの打撃、覇気まもっていたよな・・・まあ、いいか。

授業が再開した。

2時間目が終わり、休み時間に入った。また、俺と、一夏が会話していると。

「ちよつと、よろしくて?」

声のする方を向くと今度は、金髪でいかにもお嬢様みたいな雰囲気的女子が立っていた。
た。

「なんだ?」

「まあ!なんですよ、その返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、

それ相応

の態度というものがあるんじゃないかしら？」

はあー、と心の中でため息をつくエース。これが、織斑先生から聞いていた女尊男卑か？なんだか、

天竜人みたいな奴だな。まあ、でもあいつらは、庶民の空気すら嫌う奴らだったから、少しはましか。まあいい、寝よう。そして、何か言っていたようだが、俺は気にせず次の授業が始まるまで寝た。